

2011

8

目次
CONTENTS

- | | |
|----------------------------------|--------------------|
| 2 春の叙勲・危険業務従事者叙勲
受章おめでとうございます | 9 児童扶養手当 ほか |
| 3 国民年金保険料の免除制度について | 10 まちの話題 ほか |
| 4 水鳥 | 12 Information |
| 7 特定健診のおしらせ | 16 さわやかさん、表紙の裏側 ほか |
| 8 教育支援センターにご相談ください | |



よく狙って、狙って（第23回高ク連スポーツ大会）

水鳥

14

那珂市域の伝説展

7月23日(土)～9月4日(日)

民話や伝説は庶民の中から生まれた文芸であり、昔から語り継がれてきた文化遺産でもあります。伝説の中には、必ずしも史実を踏まえているとは限りませんが、先人の願いや知恵が含まれており、心豊かなものでもあります。民話・伝説については、教育委員会が発行した『那珂町の民話』や『瓜連町史』、楠見松男著『瓜連町の昔ばなし』があり、先祖から子孫への心を伝える架け橋となっています。今回は、特に伝説を取り上げ、「土地にまつわる伝説」、「人や動物の伝説」および今話題のパワースポットに比類する「霊験あらたかな伝説」に分けて紹介しています。たくさんの魅力ある伝説を生んだ郷土への思いを、さらに深めていただく機会となれば幸いです。



◆鞍掛石

源頼義・義家父子の東北遠征に関する伝説的史跡は、県内各地に数多く存在しています。那珂市域においてもかなりの数に上り、それらは先の『広報なか』72号で紹介しています。今回は市内およびその周辺地域にまで広がっています。市内の門部には、義家が休息した際に乗っていた馬の鞍を掛けたとされる「鞍掛石」があります。これと同じ名の石が常陸太田の真弓町にもあります。義家が戦勝を祈願して朱塗りの弓を納めたので「真弓山」の名が起こり、雪の上に膝をついて長いこと祈願したのでその下が寒水石となり、膝の跡がついた「膝掛石」もあります。また、菅谷の旧349号の両側には大きな「宮の池」があり、古代にはその畔に鹿島神社がありました。義家

「土地にまつわる伝説」 「八幡太郎義家伝説」



◆記念碑



◆鹿島神社

は、東北遠征の途次神社に立ち寄り戦勝を祈願しました。平定の帰途お礼の参拝をしたおりに、菅草で社殿を造り鹿島神社の隣に八幡の神を祀りました。これにより、「菅屋」から「菅谷」の地名が起こり、鹿島・八幡を併せて「両宮」の名称が起こり、「宮の池」の名も付けられました。現在の鹿島神社は、安政4年(1857)に両宮の地から遷宮されたものです。上河内の素戔神社境内には義家が軍を休めたときに兜を掛けたとされる松があります。現在は数代目の松と記念碑が建っています。



◆母蓮如の墓

岩瀬城(常陸大宮市)の城主白石志摩守義光は佐竹氏に敗れて戦死し、その母子は縁者である鴻巣鷲神社隣の慈眼寺を頼って身を寄せました。母は子どもを養育するために、名の通っていた常福寺了実上人に預けました。母は自らも尼となり、我が子が無事に修業に堪えられるように、また亡父の菩提を弔うためにと風雨を問わず毎日鴻巣から瓜連の寺へ通い続けて見守りました。母蓮如(写真はその墓)の深い愛情と強い信念をうかがうことが出来ます。母が通い続けた道筋は比丘尼街道と呼ばれ、その子はやがて常福寺2代目の住職了誉上人となりました。親子の心の通じ合いの力を思い起こさせてくれます。

「常福寺了誉上人と比丘尼街道」

「人や動物の伝説」

「孝子善重と与重」

―野仲自治会が被災碑を修復―

江戸時代中頃のこと、五台村野中の百姓理兵衛には善重・与重の兄弟がおり、兄弟は両親の教えをよく守り労苦をいとわず熱心に働きました。しかし暮らしは一向によくならず、心配した近所の人たちが弟与重を他家へ養子にと勧めましたが、与重は受けません。「自分はこの家を離れないし、それは父の本意でもあろう」と。兄は田畑を分けようとしたが、それは家の財産を少なくすることであるからとこれまた受けません。

この兄弟の美しい情愛が郡奉行に聞こえ、さらに藩に届いて6代藩主徳川治保から表彰されました。天明8年（1788）のことです。このような善行が広く行き渡るようにと大正7年（1918）に顕彰碑（題字の「錫類」は茨城県知事力石雄一郎）が建てられました。これが、この度の東日本大震災により台石から落下・転倒しました。これを、この度野仲自治会員が協議し、郷土の誇りでもあるこの碑を修復して元通りに建て直してくれました。自治会員の心根を示す温かな話題です。



◆顕彰碑

「四匹の狐」 ―めぐってみるのも一興―

静の青木山に四匹の兄弟狐が住んでいました。ある日、「私たちの仲間には、いたずらして人間を困らせるものもいるが、何か役に立つことをしよう」と相談した兄弟狐たち。そこで長男の源太郎狐は本家の里を守り、大きな川を守る。次男の甚二郎狐は田畑を開墾し、灌漑・稲作を教えた。三男の紋三郎狐は山を守り、四男の四郎介狐は海を守ることとなった。こうして衣食住にわたって人間の生活を大いに高めた四匹の狐たちは人々の尊敬を受けるところとなりました。現在、源太郎狐は瓜連城に（常福寺境内稲荷）、甚二郎狐は米崎城に（本米崎稲荷、城跡は残存しない）、紋三郎狐は笠間城に（笠間稲荷）、四郎介狐は湊城に（ひたちなか

市湊中央稲荷）と、それぞれの郷土の稲荷神社として祀られています。総合センターらばーるの前庭には「四匹の狐」のミニチュメントが置かれています。郷土づくりや協働の意義、自然への畏敬や感謝の念に思い

をいたしながら四社をめぐって見るのも楽しみの一つと思えます。



◆甚二郎狐



◆源太郎狐



◆四郎介狐



◆紋三郎狐

【霊験あらたかな話】

「北向き地藏尊」
「境内は根本ふみさんが毎朝清掃」

この地藏尊は南酒出に祀られています。久慈川の洪水により対岸の小島にあった地藏尊が流れ着き、村の人々は総出で南向きに安置して供養しました。ところがその晩のこと、地藏の森の方から鳴き声のようなものが聞こえてくる。明けて朝早く行ってみると地藏は北を向いている。直してもなおしても北を向いてしまい、夜泣きの声が続いた。よくよく耳を澄まして聴いてみると「北が恋しい、北が恋しい」との地藏の声。村人たちは地藏尊を故郷でもある北方の小島に向けて安置することにしました。それ以来、地藏尊の夜泣きがやんだという。この地藏尊は安産に御利益があり、難聴も治ると伝えられています。ここには、村人たちの優しい心根がうかがえます。

また、驚くことにこの境内はいつ訪ねてもきれいに掃き清められています。現在は南酒出東前組で管理されていますが、中でも地藏尊の隣にお住まいの根本ふみさんは、「これまで災難を乗り越えてこられたのはお地藏様のおかげ、朝の清掃をしてから私の一日は始まる、やらないと気が済まないのです。これは母の遺志でもあるんですよ。」と控えめに話されていました。



◆境内



◆北向き地藏尊

「くすぐり地藏尊」

下大賀の弘願寺境内にある地藏尊です。釈迦は、「人には生老病死の四苦がある」と説いています。これらの苦難から逃れたいと思うことは自然の気持ちです。本人が痛み苦しんでいる部位と同じ地藏尊の部位をさすり（くすぐり）ながら平癒を祈願すると、地藏尊は代ってその病を引き受けてくれるので、身代わり地藏尊とも呼ばれています。現在、地藏尊の腹部は空洞化しています。胃腸関係が最も多い病と思われます。



◆くすぐり地藏尊

「丑の刻参り」

江戸時代のこと、菅谷仲之内に下人や小作人を使って大百姓を営んでいた軍司四郎左衛門がいました。ある日、彼に恨みを持つ者が丑三つ時（午前2時頃）に、彼をかたどった藁

人形を鎮守のご神木に5寸釘で打ち付けて呪ったのです。四郎左衛門の頭は破れるように痛みました。彼は苦痛に堪えられず、呪いの難から逃れようと菅谷の鹿島神社や不動尊に一心に祈願しましたがなかなか治りませんでした。ある朝、正覚寺（浄土真宗）へ参りご本尊の阿弥陀如来を伏し拝みました。その時、阿弥陀如来が下りてきて足で四郎左衛門の頭を蹴ると、頭の真ん中から長い釘が抜け出し、どっと血があふれ出しました。悶絶した四郎左衛門もやがて回復し、苦痛も取れてしまいました。感きわまつた四郎左衛門は、さっそく浄土真宗の門徒になったと言われています。



◆正覚寺